

SDGs を意識した地域づくりに小学校社会科の地域学習副読本は活用できるか

Can We Utilize Special Textbooks for Local Study and Community Learning Used in Social Studies at Elementary Schools to Local Community Development with Awareness of the SDGs?

河本大地 (奈良教育大学)

Daichi KOHMOTO (Nara University of Education)

要旨 SDGs (持続可能な開発目標) は、2030 年までの達成が目指されている世界共通の目標である。本稿では、これを意識した地域づくりに、小学校社会科の地域学習で使われることの多い市区町村単位の副読本を活用できるかを検討する。奈良県広陵町および兵庫県香美町の副読本を用いて教員研修や授業を実践し、その結果を整理・考察した。自地域の過去が途上国の状況と類似していることを見出すなど「グローバル」な学びにつながることで、地場産業や第一次産業に関する学びの動機付けにつながることで、地域の未来をどうかたちづくるかという観点から学校教育における地域学習を再構成する契機になることなどが明らかになった。

キーワード 地域づくり, 持続可能な開発, SDGs, 地域学習, グローカル

1. はじめに

1. 1. 目的と背景

本研究の目的は、SDGs (持続可能な開発目標、図 1) を意識した地域づくりに、小学校社会科の地域学習 (身近

な地域の学習) で使われることの多い市区町村単位の副読本を活用できるかを検討することである。

SDGs は、2015 年の国連サミットにおいて全ての加盟国が合意した「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の中で掲げられた、世界共通の目標である。「誰一人



図 1 SDGs のロゴ

(国際連合広報センター (2020) [1]より転載。)

取り残さない (leave no one behind)」、持続可能で多様性と包摂性のある社会を 2030 年までに実現することが目指されている。MDGs (ミレニアム開発目標) という、2001 年に国連で策定された、2015 年を期限としていた発展途上国・地域向けの目標を前身とするが、いわゆる先進国も含めたすべての国の目標となった点は大きな違いである。

SDGs には、社会・経済・環境の 3 側面について統合的に取り組んで解決していくべきとされる 17 の目標 (ゴール) と、169 のターゲット、232 の指標が定められている。外務省国際協力局 (2020) [2] は、17 の目標を下記のように訳している。

- ・目標 1【貧困】：あらゆる場所あらゆる形態の貧困を終わらせる
- ・目標 2【飢餓】：飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養の改善を実現し、持続可能な農業を促進する
- ・目標 3【保健】：あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する
- ・目標 4【教育】：すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する
- ・目標 5【ジェンダー】：ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワーメントを行う
- ・目標 6【水・衛生】：すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する
- ・目標 7【エネルギー】：すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する
- ・目標 8【経済成長と雇用】：包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用 (ディーセント・ワーク) を促進する
- ・目標 9【インフラ、産業化、イノベーション】：強靱 (レジリエント) なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る
- ・目標 10【不平等】：国内及び各国家間の不平等を是正する
- ・目標 11【持続可能な都市】：包摂的で安全かつ強靱 (レジリエント) で持続可能な都市及び人間居住を実現する
- ・目標 12【持続可能な消費と生産】：持続可能な消費生産形態を確保する
- ・目標 13【気候変動】：気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる
- ・目標 14【海洋資源】：持続可能な開発のために、海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する

・目標 15【陸上資源】：陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する

・目標 16【平和】：持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する

・目標 17【実施手段】：持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化させる

この SDGs について日本では、政策的には、2016 年 5 月に政府が SDGs 推進本部を設置し、同年 11 月に「持続可能な開発目標」(SDGs) 実施指針」を定め、内閣府地方創生推進室が 2018 年から「SDGs 未来都市」選定を行ってモデル事業に補助金を交付するなど、積極的な推進がなされてきた。また、SDGs を意識した地域づくりについては、ここ数年で多数の書籍が刊行され (筧、2019 ; 田中ほか編、2019 ; 高木、2020、山口ほか編、2020 など) [3] [4] [5] [6]、イベント等も多数行われている。本誌でも、金山 (2019) [7] が SDGs を参照しつつ地域鉄道の観光需要について調査・考察している。

このように SDGs をめぐる動きは華々しさをみせているが、持続可能な開発を一過性のブームに終わらせてはならない。持続可能な社会を本気で実現するには、足元の地域をしっかりとみて、ESD (持続可能な開発のための教育) 等を通じ、地道かつ着実に持続可能な開発の担い手を育成していくことが重要である。しかし、SDGs を意識した地域づくりと、学校教育における地域学習とをつなぐ研究や実践は、ほとんどみられない。

ここで、学校教育における地域学習について押さえておきたいことがある。小学校では、1・2 年次の生活科を経て、3 年次から社会科が始まる。その 3 年次の社会科の多くを、学校のある市区町村に関する地域学習 (身近な地域の学習) が占める。そこでの学びは、4 年次の都道府県に関する学習を経て、日本や世界の各地および全体を理解する際の基盤になる。小学校社会科の地域学習には、児童が日々体験している生活空間から学べることに意義があり (赤羽、1989) [8]、郷土教育と呼ばれることの多かった時代のものも含め、数多くの実践が蓄積されている。

この小学校社会科 3 年次の地域学習では、市区町村単位の副読本が使用されることが多い。その多くは市区町村の教育委員会が発行しており、地域によっては 4 年次

や5・6年次の社会科、また総合的な学習の時間や理科などでも用いられることがある。中学生向けの副読本が編まれることもある。本稿では既往研究のレビューは割愛するが、地域学習副読本については、社会科教育・地理教育の分野を中心に数多くの分析・研究が積み重ねられてきた。

しかし、小学校社会科の地域学習については、児童の多くには、今後の自分の生き方を考えていくこととの関係を実感できていないとの指摘がある(佐藤, 2019) [9]。また、教員についても、筆者が各所での学校訪問や教員研修などで聞くところによると、多忙化や異動の広域化、学区の広域化などに伴い、勤務校周辺の地域に詳しくない場合が多くなっている。さらに、保護者や地域住民の大半は、地域学習副読本について存在を知らないか、知っていてもあまり手に取っていないと思われる。

さらに、SDGsをふまえた地域づくりと、社会科における地域学習との関係は、社会科教育・地理教育の分野においても、またSDGsを扱った文献や授業実践等においても、ほとんど検討されていない。ESD(持続可能な開発のための教育)では、「localやcommunityといった空間スケールの比較的小さい『地域』において基盤となる経験を積み、国家スケールや世界スケールと関連づけながら、社会の見方を学ぶことが重視されている」(河本, 2015) [10]。地域学習副読本は、まさにlocalやcommunityといった空間スケールの比較的小さい「地域」を扱った、全国各地で用いられている教材である。これをSDGsの観点で見ると、ローカルな地域を未来志向でとらえて地域の将来像を構想したり、ローカルとグローバルをつないだ学びを創出したりできると考えられる。

1. 2. 方法と対象

奈良県北葛城郡広陵町および兵庫県美方郡香美町の小学校の社会科で使用されている地域学習副読本を用いて、SDGsを意識した地域づくりに関する現職教員の研修、および教員養成段階の大学生に対する授業を行った。これらの実践を整理・省察して課題や注意点等を見出し、地域づくりへの活用可能性を検討する。両町は、農山漁村地域としての性格を有している点は共通しているが、大都市からの距離や、産業構造、地形、広域合併の経験の有無などで好対照をなす。

奈良県広陵町は、奈良盆地(大和平野)の南西部に位置する水田稲作地域であったが、大阪大都市圏の郊外の一隅でもあり、丘陵上を中心に香芝市にまたがる住宅団地(真美ヶ丘ニュータウン)が広がっている。2校ある中学校のひとつは旧来の農村地域の中に、もうひとつは

住宅団地の中にあり、それぞれの学区の特性は大きく異なる。旧来の農村地域においては、靴下製造が地場産業のひとつとなってきた。「平成の大合併」では近隣市町との合併の動きもあったが単独町制を維持している。

一方、兵庫県香美町は、日本海に面しカニやイカなどの漁業の盛んな香住(かすみ)区、そこへと流れる矢田川の源流域で多雪の中国山地に位置する、但馬牛の産地である小代(おじろ)区および村岡区の、3つの地域自治体からなる。大阪や神戸よりも近い鳥取市との関係が経済的には強い。「平成の大合併」で城崎郡香住町、美方郡美方町、美方郡村岡町の3町が合併して成立した町である。筆者は香美町、とりわけ小代区の地域づくりに2008年から関わっており、それが同区の「日本で最も美しい村」連合への加盟や、この地をゼミ活動で頻りに訪れていた学生数名の卒業後の移住・結婚などの動きにつながっている(河本, 2019a, b) [11] [12]。そのため、2015年に他大学から奈良教育大学に移った後も学生の学びのフィールドとさせてもらっている。

奈良県広陵町では、奈良教育大学が中心となって組織している近畿ESDコンソーシアムが2018年9月に同町で実施した現職教員向けのESD研修において、副読本『わたしたちの広陵町』(西井ほか編, 2016) [13]を用いて、SDGsの17目標に関わる題材を探すワークショップを実施した(図2)。兵庫県香美町については、奈良教育大学教育学部の教養科目「フィールドワークで地域に学ぶ」の授業において、2019年4月に副読本『わたしたちの町香美町』(香美町教育研修所小学校社会科副読本編集委員会編, 2019) [14]を用いて、フィールドワークのための事前学習の一環として同様のワークショップを実施した。両町における方法や位置づけの詳細については、第2章・第3章にそれぞれ記す。



図2 広陵町におけるワークショップの様子
(河野晋也氏撮影。)

なお、学術研究としては、本来であれば各地で作成・活用されている地域学習副読本の多様性を確認したうえで、同一条件で比較検討できる調査対象を選定すべきところである。しかし、本稿では教員研修および教員養成における実践を、筆者が縁あって関わったそれぞれ異なる地域について扱っている。また、副読本分析や結果記載の方法も、探索的に実施したためそれぞれ異なっている。この点で教育科学として方法論的な課題があることは認識しているが、実践のパイオニアとしての意義と、多様な実践方法を提示することの意義を優先し、SDGsを意識した地域づくりへの活用の拡がりとは今後の研究蓄積を企図して公表するものである。

2. 奈良県広陵町の副読本を用いた教員研修の取り組み

2. 1. 方法

広陵町でのESD研修ではまず、SDGs策定に至るまでの国際的な経緯と、ESDの概要を述べた。第1章で述べたような、これまでの日本のかかわりや、従前のMDGs（ミレニアム開発目標）から何が変わったのかを中心に扱った。そのうえで、広陵町教育委員会が発行している地域学習副読本『わたしたちの広陵町』（2016年改訂版、図3）を用いて、SDGsの17目標に関わる題材を探すワークショップを行った。

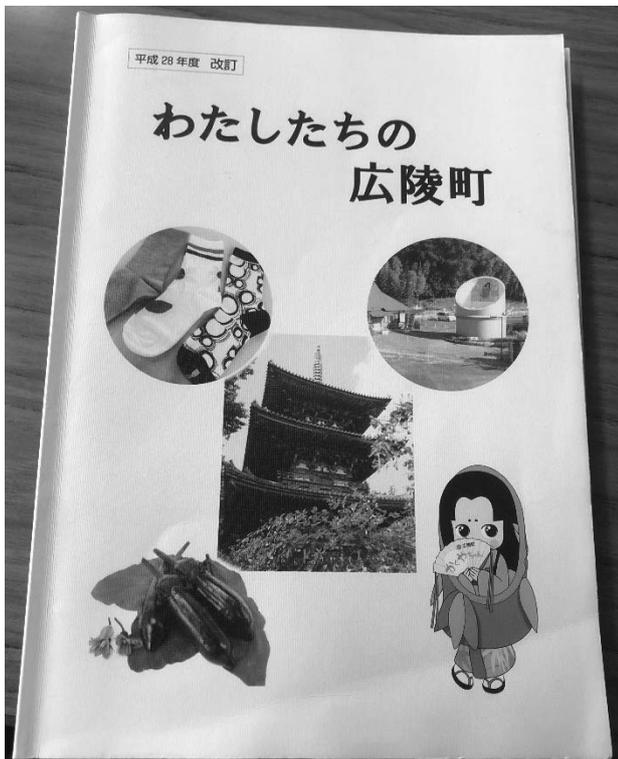


図3 『わたしたちの広陵町』の表紙
(筆者撮影。)

2. 2. 結果

表1に、『わたしたちの広陵町』の構成（目次への記載からページ番号等を除いたもの）を示す。受講者は議論の結果、SDGsの各目標との関連を以下のように考えた。各目標の内容は、第1章第1節に示したものを参照されたい。

まず、目標1は「昔からつたわる行事」と、目標2は「参考資料 私たちの町の歴史」に記されている広陵町百済で起きた「百済百姓一揆」と、目標3は「町にあるしせつ」とその中の「公園」、および「かんきょうにやさしい町づくり」にある「ごみゼロ社会をめざして」に関連すると考えた。また、目標4は「町にあるしせつ」、および「町の人びとのくらしのうつりかわり」の中の「町の学校の歴史」と、目標5は「町の人びとのくらしのうつりかわり」にある「おかあさんが子どものころの学校（1985年ごろ）」の写真と関連する。目標6は「昔をしらべる」および「かんきょうにやさしい町づくり」と、目標7は「昔をしらべる」、および「かんきょうにやさしい町づくり」の「ごみゼロ社会をめざして」と、目標8は「農家の仕事」「くつ下工場」「広陵町から出る品物」と、目標9は「くつ下工場」、および「品物はどこから」の「品物が届くまで」と、目標10は「町にあるしせつ」「昔からつたわる行事」との関連があると考えた。

最も関連する項目が多く出たのは目標11で、「町にあるしせつ」「くつ下工場」「商店のはたらき」「昔からつたわる行事」、そして「かんきょうにやさしい町づくり」の「ごみゼロ社会をめざして」、「参考資料 私たちの町の歴史」の「馬見古墳群と葛城氏」が挙げられた。目標12は「農家の仕事」と「くつ下工場」、目標13は「農家の仕事」、目標14は「かんきょうにやさしい町づくり」、目標15は「米作り」と「なす作り」、目標16は「昔からつたわる行事」、そして目標17は「町にあるしせつ」および「農業協同組合（JA）」が関連すると考えた。

2. 3. 考察

以上の結果から、受講者はSDGsの17目標がいずれも何らかの形で『わたしたちの広陵町』の内容と関連していると考えたことがわかる。ただし目標によって著しく多寡があり、目標11が突出している一方で、目標1・2・5・13・14・16は1項目ずつしか出ていない。最も該当項目を探すのが難航したのは、目標5である。1人の教員が、「町の人びとのくらしのうつりかわり」の「おかあさんが子どものころの学校（1985年ごろ）」に掲載されている、体育行事と思われる写真において、運動場で女

表1 SDGsの17目標と関連する『わたしたちの広陵町』の項目

内容	目標	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	計
1 わたしたちの町のように																			0
(1) わたしたちの校区をしらべよう																			0
1 家のまわりのようす																			0
2 校区のようす																			0
3 校区の地図																			0
(2) 町内めぐりをしよう																			0
1 ビルの屋上から																			0
2 わたしたちの町をしらべる																			0
●町のいろいろなところ																			0
3 町全体のようす																			0
(3) 町にあるしせつ				1	1						1	1						1	5
●図書館																			0
●広陵中央公民館																			0
●公園				1															1
2 わたしたちのくらしとはたらく人びと																			0
(1) ものをつくる人びとのしごと																			0
1 農家の仕事										1			1	1					3
●米作り																			1
●なす作り																1			1
●農業協同組合(JA)																		1	1
2 工場の仕事																			0
●くつ下工場									1	1		1	1						4
(2) 店ではたらく人びとのしごと																			0
1 商店のはたらき												1							1
●いろいろな店																			0
●町の店の数																			0
●買い物しらべ																			0
●店の見学																			0
2 商店の人びとのくふう																			0
●商店がい																			0
●スーパーマーケット																			0
3 品物はどこから											1								1
●広陵町から出る品物										1									1
3 町の人びとのくらしのうつりかわり					1	1													2
(1) 昔をしらべる							1	1											2
1 古い道具しらべ																			0
2 くらしの道具																			0
3 農家の道具																			0
(2) 昔からつたわる行事		1									1	1					1		4
1 さまざまな行事																			0
2 祭りしらべ																			0
(3) わたしたちのねがい																			0
1 かんきょうにやさしい町づくり				1			1	1				1			1				5
2 ふるさと・広陵																			0
参考資料			1									1							2
計		1	1	3	2	1	2	2	3	2	2	6	2	1	1	2	1	2	34

子だけが何かの踊りを披露している様子が該当すると判断し、それが共有された。

特筆されるのは、地域の伝統行事や歴史について扱われた項目が、目標1・2・6といった、主に途上国・地域を対象としMDGsから引き継がれている目標(中澤・辰己、2018)[15]につながると考えられたことである。これは、広陵町の過去に、現在の途上国・地域のおかれている状況が重ねられたと解釈できる。身近な地域の開発(発展)の軌跡や過去の人々の願いに、現在の途上国・地域との共通性があると考え、ローカルとグローバルをつないだ学びが実現できると思われる。

地場産業について扱った項目である「くつ下工場」が該当するSDGsの目標が多いことも、注目に値する。長い歴史をもつ地場産業について、ローカルな視点だけでなく多まらない価値づけができる点も、SDGsをとりいれる利点と言える。

さらに、広陵町は前述のとおり、香芝市にまたがる真美ヶ丘ニュータウンなどの住宅団地と旧来の農村地域とに二分される。住宅団地で育つ子どもにとっては、靴下工場のみならず農業なども縁遠い存在になりがちである。しかしSDGsの目標と照らし合わせると、目標12・13・15・17など多くの箇所に農業関係の項目が位置づく。第一次産業や農山漁村地域に関する学びの動機付けや広がりにも活用することも可能性として考えられる結果となっている。

このように、地域教材を通じてSDGsを理解する、あるいは地域学習にSDGsをとりいれることは、身近な地域の成り立ちや在り方を多角的にみることになる。それはまた、地域学習に世界の課題について考えるための基盤づくりという役割を付与し、その観点から再構成することにもつながる。

3. 兵庫県香美町の副読本を用いた教員養成の取り組み

3. 1. 方法

副読本『わたしたちの町 香美町』について、2019年4月から使用されている版の内容を、奈良教育大学の2019年度前期の教養科目「フィールドワークで地域に学ぶ」の受講生8名が各自、SDGsの17目標と対照させた。受講生は、香美町小代区で実施したフィールドワーク(初回は5月で2泊3日)の事前学習として、この作業をおこなった。

いずれの学生もSDGsを知らない状況であったため、その策定の背景や性格について、広陵町の場合と同様に、作業前に説明した。その後、各自の提出した結果を、筆者が表2の形に整理して提示し、その内容を学生とともに考察した。

3. 2. 結果と考察

表2は、『わたしたちの町 香美町』の項目と、SDGsの17目標である。表中の数字は、各項目に各目標が該当すると考えた学生の数を示している。

まず、SDGsの17目標ごとに、学生が副読本の各項目について該当すると判断した箇所およびその人数の合計をみる。目標5を除くすべての目標に、該当箇所がみられる。最も多いのは、目標11で75にのぼる。商店街やコンビニ、町民憲章、地形と土地利用、公共施設、防災、県の概要について、3名以上が該当すると判断している。これに、目標8の50(工場、スーパーマーケット、「但馬牛の祖」など)、目標15の34(地形と土地利用、米作など)、目標9の31(工場、観光地、「香住漁港の父」や「但馬牛の祖」など)が続く。概括すると、地域資源を活かした経済・産業の発展によるまちづくりが大きく取り上げられていると言える。

SDGsの観点から最も学生の評価の高かった項目、すなわち表2の右端の数字が大きい項目のひとつは、「香住漁港の父 一長(ちょう) 瀬(ひろし)・耕作 父子」である。長瀬(1859年~1921年)は、「小さな漁船(帆船)や地引きあみで漁をするまじしい村だった」香住における初代の漁業組合長として、また村長・県会議員として、漁港の整備を国や県に働きかけたが、志半ばで逝去した。その子である長耕作は、第3代漁業組合長・村長・町長を務め、父親の志を継いだ。この父子2代にわたる苦心と努力により、現在の香住漁港の礎が築かれ、漁業や加工業・運搬業などが発展した旨が記されている。海洋資源に関わる目標14や、経済や産業に関わる目標8・9など、6つの目標が該当としている。

同数で評価の高かった項目は「わたしたちの県の自然

や産業と人々の暮らし」で、ここには兵庫県を構成する阪神・播磨・但馬・丹波・淡路の5地域の地理的特徴が記されている。たとえば香美町の属する但馬地域については、「海や山、温泉など豊かな自然を利用した産業に力を入れています」とし、漁業(松葉ガニ・イカ釣り等)、観光(温泉・スキー等)、但馬牛の産地である旨や、豊岡が「伝統工芸である柵柳細工(きりゅうざいく)をもとに発達したかばん作り、コウノトリの生息地として全国に知られて」いることが記されている。この項目については、学生はSDGsの17目標のうち、目標8や目標9をはじめとする10の目標が該当すると考えており、全項目の中で最も分散している。

次に該当目標の数が多い項目は「香美町小学生のみなさんへ」の第2段落で、7つの目標に分散している。ここには、次のように記されている。「山と海に囲まれた私たちの町は、その中を南北に流れる矢田川の清らかな水が、豊かな農産物・水産物をはぐくみ、自然を求める多くの観光客が四季を通じて訪れるすばらしい心のふるさどです。先人たちは、遠い昔から力を合わせて山野を切り拓き、田畑や海を活かして産業をおこし、生活を高めるとともに、知恵を出し、たゆみない努力と工夫を重ねながら、地域文化の創造を図り、現在の香美町の礎を築いてきました」。ここにも、「わたしたちの県の自然や産業と人々の暮らし」と同様に地域多様性が表現されており、地域の自然地理的特徴や、それを活用・克服しながらその地に即した産業・生活・文化を形づくってきた人々を、SDGsを通じて多様な観点からみる形となっている。

しかし、ジェンダー平等を掲げている目標5に該当する箇所を見つけた学生は皆無であった。また、人や国の不平等に着目する目標10、平和と公正に着目する目標16、気候変動に着目した目標13についても、該当箇所は少数という結果になった。これらは香美町の副読本の弱い点と言える。

とはいえ、少数ではあっても、該当箇所を選んだ学生に理由を聞き出して共有すると、他の学生は視野を広げ、SDGsへの理解を増すことができる。たとえば、不平等を扱う目標10に該当する箇所は2つ挙げられている。それらを選んだ理由を聞くと、ひとつは町民憲章に掲げられている、「人々が、ここに生まれたこと、生きることを喜び、誇りに思えるまち」や「子どもが元気に育ち、年よりがしあわせに暮らせるまち」に、誰もが平等かつ幸福に暮らしていける地域をつくろうとしていると思ったとの回答が得られた。もうひとつについては、公共施設の空間的配置に関して、地域間で平等となるよう配慮がなされているとの回答が得られた。

表2 SDGsの17目標と関連する『わたしたちの町 香美町』の項目

内容	目標	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	計
香美町小学生のみなさんへ																			
第2段落		1	1						1	1		1			1	1			2
第3段落												1							1
香美町町花／町木																			
香美町町民憲章																			
1			1	1							1	3			1	1			8
2												1			1	1			3
3				1								1							0
4									1			1							2
5					1					1		1							2
香美町町民歌																			
1番															1	1			2
2番							1												1
3番				1															1
1 わたしたちのまちはどんなまち？																			
(1)校区分けをしよう																			
・校区分け					4														4
・校区分け					3														3
(2)わたしたちの町のようす																			
・香美町の地形と土地利用												3			1	4			8
・観光客がおとずれるところ									2	4								1	7
・香美町観光マップ									2	3									5
・みんなが利用するしせつ			4								1	3				1			9
・工場があつまる場所	2								4	5									11
・田や畑の多いところ		4														3			7
2 ぐらしをささえるまちではたらく人びと																			
(1)店ではたらく人びとのしごと																			
・よく行く店はどこ									1										1
・スーパーマーケットへ見学に行こう									2			2	1						2
・品物はどこから	1							1				1	1		1	1		2	5
・商店がいのくふうやどりよく									2			5	1					1	9
・べんりなコンビニエンスストア	1								2			4							7
(2)ものをつくる人びとのしごと																			
・米をつくる	1	2		1					1							3			8
・特産物をつくる	1			1					2	1			1		1	2			9
・牛を飼う	1								2	1			1			2			7
・服をつくる	1								2	2			1						6
・ほたるいかにしょうゆ漬けをつくる	1								2	1			1		1	1			7
3 昔のぐらし、見つけた																			
(1)人びとのぐらしと道具																			
・うづりかわるぐらし	1	2		1		1			1										6
・うづりかわるぐらし	1	1							1			1						1	5
(2)昔からつたわる行事																			
・行事が行われる場所				2					1										2
(3)これからのぐらしとわたしたちのねがい																			
	1											1							3
4 健康なぐらしをささえる																			
(1)ごみのしよりと活用																			
・ぐらしとごみ								3				1	2						3
・クリーンパーク北但								1	1			1	2						4
・かんきょうを守る			1					1				1	3	1					5
・クリーンパーク北但(リサイクルセンター)								1				1	2			1			7
・ごみをへらそう、生かそう大作戦								1				1	2						5
(2)命とぐらしをささえる水																			
・ぐらしと水			1			4									1	1			6
・水の旅						2						1							4
・飲み水がつくれるしくみ						2	1					1							4
・水のめぐみをたいせつに						2	1					2	1			1			7
5 安全なぐらしをまもる																			
(1)なくそうこわい火事																			
・火事がおきると			1																2
・消防署の仕事とはたらき																			2
・救急について																			2
・ぐらしと命は自分たちの手で守ろう																			2
(2)ふせごう交通事故や盗難事件																			
・交通事故を防ぐ			1										2						1
・警察のしくみと仕事について調べてみよう													2						3
・盗難事件をふせぐ																			1
・安全を守る																			2
(3)自然災害から人々を守る																			
			1		1								3		2				7
6 地域の発展につくした人																			
(1)へき地医りように生きた歌人 丸山修三																			
			5							1			1						7
(2)香住漁港の父 長 熙・耕作父子																			
	2	2								2	3				4				14
(3)但馬牛の祖 前田周助																			
	2	1								3	3					1			11
7 わたしたちの住んでる県																			
(1)わたしたちの県のようす																			
・香美町のある兵庫県				1	1							3			1	1			8
・兵庫県のすがた					1				1			1							3
・土地のようす															1	2			3
・人口と交通のようす													2						2
(2)わたしたちの県の自然や産業と人々のぐらし																			
・県内の伝統工業	1	1			1				3	3		1	1		1	1			14
・人やものでつながるわたしたちの県					1				2	1		1							5
あとがき																			
計																			1
	20	16	21	23	0	14	12	50	31	2	75	23	4	17	34	3	18		363

4. おわりに

本実践の成果は3点にまとめられる。第一に、身近な地域の過去の状況に、現在の途上国・地域における状況との類似性があるという気付きが得られ、ローカルとグローバルとを直接結び付けた「グローカル」な学びの可能性が見出された。これは、身近な地域（ローカル）の学習に積極的に取り組む理由のひとつになると考えられる。また、身近な地域で取り組まれてきた様々な営為やそれに関わってきた人々を、グローバルな観点で再評価することにつながる。さらに、現在の途上国・地域の抱える課題を、より学習者に引き付けてとらえることにつながる。

第二に、地場産業や第一次産業（農業・林業・漁業等）に関する学びの動機付けや広がりにつながった。これらは、児童・生徒のみならず担当する教員や、地域住民にとってもなじみが薄い場合がある。SDGsを通じて学びの必然性を見出し、学習意欲の喚起につなげることが、持続可能な地域社会の構築には重要と考えられる。

第三に、こうした取組は、地域の未来をどうつくっていくかという観点から学校教育における地域学習を再構成する契機になる。本実践では、ジェンダー平等などの観点が地域学習副読本に弱いという特徴が明らかになった。小学校社会科の地域学習においてSDGsの17目標すべてを網羅的に扱うのは難しい。しかし、この気づきは、たとえば自治体による子育て支援の政策をジェンダーの視点でみるなどの学習活動につなげることができる。この取組を行うことで、従来の地域学習副読本にはなかった、しかし地域の未来をつくるために重要な要素を、児童と教員と地域住民等とで探究することが可能になる。副読本の改訂時に考慮すべき事項のあぶり出しや、他の教科・単元・地域資源との関係を意識・省察したカリキュラムマネジメントにつなげることができる。

以上は、受講者の大半が事前には意識していないことであった。いずれも地域づくりにおいては重要な視点と考えられるが、学校教育の世界ではほとんど意識されていないと言ってよい。学校教育界においては、地域学習の副読本をSDGsの観点から読み解くことは、ESDとしての地域学習の位置を確認することにつながる。また、先述のように、地域の未来をどうつくっていくかという観点から、地域学習を再構成するための一助になる。

一方で、序章で述べたように、SDGsを意識した地域づくりと、学校教育における地域学習とをつなぐ研究や実践はほとんどみられない。それは、学校教育の中身やカリキュラムを、地域づくりにかかわる人々がほとんど共

有していないことを意味する。本稿で取り上げた実践は、地域学習の副読本の内容をSDGsの17目標に位置づけるというシンプルなものであったが、そのシンプルな導入ゆえに、たとえば地域資源を活用したビジネスを行う人々の勉強会や、公民館活動や、保護者の集まりなど、学校教育の外側にある社会教育などの場においても容易に実践可能である。地域づくりの幅は、地域の子どもたちがどのように自分の地域について学んでいるかを知り、それぞれの立場や経験をふまえて地域の教育に関わることで広げることができる。地域学習の副読本は順次改訂されていくものであるため、自身が小学生の頃に使っていたものをもSDGsの観点で読み解き、現行のものと比較するのもよいだろう。「平成の大合併」前の市町村の地域学習副読本と比較すると、広域化した自治体の中での自地域の在り方を考えることにもつながる。さらに、複数の自治体の副読本を比較検討すると、自分の市区町村の地域学習の強み・弱みを認識することもできる。SDGsを意識した地域づくりは、これらをグローバルな視野と未来志向をもって考えられるのがポイントである。本実践を参考にした取組により、地域づくりの可能性を大いに広げることができると思われる。

なお、2018年（平成29年）に告示された中学校の新学習指導要領では、社会科地理的分野の最終段階に、地域の将来像を描く「地域の在り方」という単元が登場した。2021年度からすべての中学校で全面実施される。ここにおいて小学校中学年時等で用いた副読本を用いると、学習者は小学生の頃の地域に対する見方を振り返り、新たな視点で地域を見つめなおすことができると考えられる。中学校教員は往々にして、本稿で扱った小学校社会科における地域学習副読本の存在をあまり意識していない。しかしこうした実践は、地域学習の小中一貫化を強めることにもつながる。学校教育界に身を置いていない方々にも、これは知っておいてほしい。今後の実践展開のアイディアとして付しておく。

付記

本研究で用いた副読本は、広陵町教育委員会および香美町教育委員会のご配慮により参照できました。両教育委員会に感謝申し上げます。なお、本研究の骨子は、2019年8月19日の日本ESD学会第2回大会（於：宮城教育大学）、10月19日のThe 14th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography（於：岡山大学津島キャンパス）、11月17日の2019年人文地理学会大会（於：関西大学千里山キャンパス）で発表しました。その際およびその後にご質問・ご意見を頂戴し議論させていただきま

した皆様にも、感謝申し上げます。

引用・参考文献

- [1]国際連合広報センター, 2020, SDGs のポスター・ロゴ・アイコンおよびガイドライン https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/sdgs_logo/
- [2]外務省国際協力局, 2020, 『持続可能な開発目標 (SDGs) と日本の取組』, 外務省国際協力局, 8p. https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/SDGs_pamphlet.pdf
- [3]寛 裕介, 2019, 『持続可能な地域のつくり方—未来を育む「人と経済の生態系」のデザイナー—』, 英治出版, 424p.
- [4]田中治彦・枝廣淳子・久保田 崇編, 2019, 『SDGs とまちづくり—持続可能な地域と学びづくり—』, 学文社, 288p.
- [5]高木 超, 2020, 『SDGs×自治体 実践ガイドブック—現場で活かせる知識と手法—』, 学芸出版社, 208p.
- [6]山口幹幸・高見沢 実・牧瀬 稔編, 2020, 『SDGs を実現するまちづくり—暮らしやすい地域であるためには—』, プロGRESS, 256p.
- [7]金山智子, 2019, 共創型デザインの視点からみる地域鉄道の観光振興, 地域活性研究, 11, pp. 81-90.
- [8]赤羽孝之, 1989, 地理教育と地域, 朝倉隆太郎編, 『地域に学ぶ社会科教育』, 東洋館出版社, pp. 23-31.
- [9]佐藤浩樹, 2019, 『小学校社会科カリキュラムの新構想—地理を基盤とした小学校社会科カリキュラムの提案—』, 学文社, 200p.
- [10]河本大地, 2015, ESD における「地域」とは?—2014年に開かれた「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するユネスコ世界会議」の宣言・提言・約束から, 奈良教育大学紀要, 64, pp. 79-84.
- [11]河本大地, 2019a, 地域の価値づけという実践—兵庫県美方郡香美町小代区の「日本で最も美しい村」連合加盟をめぐる地域と大学との連携・協働のプロセスから—, 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 5, pp. 185-195.
- [12]河本大地, 2019b, 農山村でのフィールドワークを通じた持続可能な「関係人口」づくりの実践—兵庫県美

方郡香美町小代区におけるゼミ活動から卒業生の「嫁入り」まで—, 経済地理学年報, 65, pp. 96-116.

[13]西井康浩・児島 強・児玉千愛・岸本 陽・春木純平・春木 礼編, 2016, 『わたしたちの広陵町 (平成28年度改訂)』, 広陵町教育委員会.

[14]香美町教育研修所小学校社会科副読本編集委員会編, 2019, 『わたしたちのまち 香美町』, 香美町教育委員会.

[15]中澤静男・辰巳諭子, 2018, これからのESDの方向性に関する一考察—SDGs への教育的アプローチとしてのESD—, 奈良教育大学紀要, 67, pp. 179-189.

Abstract

The SDGs (Sustainable Development Goals) are common global goals that are to be achieved by 2030. The purpose of this study is to examine how special textbooks of local study and community learning in Social Studies of elementary schools can be used for local development with awareness of SDGs. These textbooks are often published by boards of education at municipalities. Teacher training workshop and university class were conducted using the special alternative textbooks in Koryo Town, Nara Prefecture and Kami Town, Hyogo Prefecture, and the results were arranged and reviewed. The results of these practices are summarized in three points. Firstly, the fact that the past situation of the local areas has similar aspects to the current situation in developing countries has revealed the possibility of "glocal" learning, which directly links local and global learning, is one of the reasons for active engagement in local learning. Secondly, this learning activity can motivate pupils and teachers learning about local and primary industries. Thirdly, it provides an opportunity to reconstruct local learning in school education from the perspective of how to make the future of the local areas. Through this learning activity, we can bring future-oriented and global perspectives to local development.